



# 風

神戸大学 広報誌  
| kaze | Kobe University  
Public Relations Magazine  
Dec.2019 Vol.14

特集1 高濃度乳房問題を解決し次世代の乳がん検診を実現  
世界初の「マイクログラフィー」開発  
特集2 歴史文化を継承し、過去と未来をつなぐために  
市民とともに地域の歴史資料を保全



学生広報チーム & 神大うりぼー

学内探検隊!

## 鶴甲第1キャンパス LEARNING COMMONS ラーニング commons の巻

全学共通の授業が行われているので、学部問わずたくさんの学生が集う国人(鶴甲第1)キャンパス。ラーニング commons こと「ラーコモ」では皆思い思いに過ごし、勉強したり談笑したりしています。そしてラーコモを出て外のテラスに行ってみましょう。天気の良い日はとても気持ちがよく、眼下には海が広がっています。



### ラーニング commons

ここは、私語厳禁の図書館とは違い、友達と話し合いながら勉強することができます! 部活・サークルのミーティングや、プレゼンテーションの練習など、使い方は自分次第!!



### ウッドデッキのテラス

食堂上のデッキテラス。ベンチが置かれており、自由に座って休憩できるようになっています。晴れた昼休みは学生でいっぱいになることも。図書館やラーコモで勉強している時、少し息抜きに友人達とベンチに腰掛けてみてはいかがでしょうか。



経営学部4年・藤田 奈菜子  
経済学部4年・田中 凌太  
神大うりぼー

出演



発行日: 2019年12月

編集・発行: 神戸大学 総務部広報課 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 TEL.078-803-5083 FAX.078-803-5088

アートディレクション・デザイン: 有限会社ティクリエーション / 印刷: 能登印刷株式会社

©2019 神戸大学 ※本誌に掲載されている記事、写真、図表の無断転載を禁じます。

# 特集1 高濃度乳房問題を解決し次世代の乳がん検診を実現 世界初の「マイクロ波マンモグラフィ」開発

女性の死因の上位を占める乳がん。世界中で毎年160万人以上が乳がんを患い、うち50万人以上が死亡、日本でも毎年約7.8万人が乳がん罹患者、1.4万人が命を落としている。一方、乳がんは早期発見で9割以上が治るといわれており、厚生労働省は40歳以上の女性を対象に、2年に1回の乳がん検診を推奨しているが、受診率はわずか45%にとどまる。高濃度乳房、X線マンモグラフィの問題点を解消し、検査精度を飛躍的に高めた「マイクロ波マンモグラフィ」を、数理・データサイエンスセンターの木村建次郎教授が開発、自ら創立したスタートアップ企業を通じて全世界に普及させ、乳がんによる死亡者ゼロを目指す事業に乗り出している。

## 社会科学系図書館

神戸大学にある最大・最古の図書館は「社会科学系図書館」である。1903（明治36）年に開館した旧制官立神戸高等商業学校図書館の系譜を引く社会科学関係専門図書館であり、117年もの長い歴史の中で収集された蔵書数は140万冊を超える。代表的な貴重書として、複式簿記の嚆矢となった世界最古の会計書であるルカ・パチョーリ著『スママ』（1494年刊行の初版本）がある。他にも特色あるコレクションとして、阪神・淡路大震災関係資料コレクション「震災文庫」、江戸慶長期～明治初期の海事海運関係資料コレクション「住田文庫」（住田正一旧蔵）、旧摂津国八郡郡花熊村「村上家文書」、神戸開港時の土地・海運・居留地・行政等関係資料「神戸開港文書」、18世紀のウィーン近郊で実際に使用されていたカメラール簿記関連文庫（戸田博之旧蔵）、18世紀の朝鮮半島開城で実際に使用されていた簿記帳簿（平井泰太郎旧蔵）などがあり、その一部は図書館ホームページ内「デジタルアーカイブ」



閲覧机脚部の彫刻



約80年前の大閲覧室（1937（昭和12）年頃）

で電子化公開されている。1933（昭和8）年竣工の現建物は、国の登録有形文化財であり、設計は文部大臣官房建築課、施工は大林組が担当した。淡黄色のスクラッチ・タイル張りの外壁を有する鉄筋コンクリート造2階建て、後方に5階建ての書庫が繋がる。書庫には当時では珍しい昇降機装置（エレベーター）が設置された。なお、書庫は戦後に増築が繰り返されたため、竣工当初の状態をとどめる「書庫C棟」の東側のみが文化財であり、今もそこだけは木製の床となっている。玄関ホールを入ると開放的な吹き抜け階段が正面に現れ、天井スタンドガラスのトップライトから静寂の中に光が降り注ぐ魅力的な空間となっている。ちなみにスタンドガラスには「KOBE」・「UNIVERSITY」の文字が刻まれている。階段を2階へ上がると、正面に洋画家中山正實作の大壁画「青春」（1935（昭和10）年完成）が出迎えてくれる。大壁画の向かい側には「大閲覧室」があり、広い室内は心地よい緊張感が漂う。高い吹き抜けの大アーチ型天井にはスタンドガラスのトップライトが施され、重厚で歴史の重みを感じさせる木製の大型閲覧机がずらりと並び、学生たちが真剣な眼差しで勉強研究に励む。この威厳に満ちた空間から幾多の偉人たちが輩出されたことだろう。

（大学文書史料室 室長補佐 野邑 理栄子）

### ■ Contents

[特集1] 世界初の「マイクロ波マンモグラフィ」開発	03
[特集2 神大研究ズームアップ] 市民とともに地域の歴史資料を保全	08
[神大生の挑戦] 神大生による神大生のための「学生サポート」	12
[KOBE教育] 国際人間科学部 グローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)	14
[キラリ神大 OG・OB] マンガやデザインを通して、面白さと魅力を分かりやすく伝える	16
[神大×LOCAL] 「建築学生」が地域をつなぐ「まちプロジェクト」	18
[こんにちは！留学生です] マレーシアからの留学生	20
[国際ニュース] / [留学だより]	21
[神戸大学基金だより] / [アラムナイ]	22
[Mini News]	23

表紙写真：社会科学系図書館  
神戸大学の附属図書館には、マスコットキャラクターの「うりこ」がいます。図書館のwebサイトやパンフレット、掲示物などに登場し、神大うりこも顔負けの活躍をみせています。  
カメラ：大亀京助



数理データサイエンスセンター  
大学院理学研究科 教授

# 木村 建次郎

KIMURA Kenjiro

1978年岡山県生まれ。2001年京都大学工学部電気電子工学科卒業。  
2006年京都大学大学院工学研究科電子工学専攻博士課程修了。2008年より  
神戸大学大学院理学研究科講師。2012年同准教授を経て、2018年より現職。  
2012年株式会社Integral Geometry Science設立。

数理科学的な理論や方法の探求により観測の科学に革新をもたらし、  
人類が自然界の心理を理解するための眼、Mother of Scienceを届けます。



# 散乱したマイクロ波から 乳房内のがん組織を瞬時に3次元映像化

マイクロ波マンモグラフィ開発の背景には、木村教授が応用数学史上の未解決問題だった「波動散乱の逆問題」を世界で初めて解析的に解き、この「多重経路散乱場理論」を実用的な応用につなげるというブレークスルーがあった。その応用分野は急速に広がりを見せ、巨大なビジネスに発展しようとしている。

## 乳がんを超高精度に検知し、 早期発見・治療を促進

— 現行の乳がん検査に使われるX線マンモグラフィの重大な課題、高濃度乳房とは？

現行の世界標準として広く普及しているX線マンモグラフィは、50歳以下のアジア人の79%、欧米人の61%、黒人の57%、ヒスパニックの55%を占める高濃度乳房を持つ女性には適用できないのです。コラーゲン繊維が豊富に含まれる高濃度乳房の場合、X線がうまく通らず、乳房全体が白く写ってしまい、同様に白く写るがん組織との区別が付きません。また、しばしば併用される超音波（エコー）も、乳房内の減衰が大きく、深くまで届かないうえ、再現性に問題があります。その結

果、コントラスト比が低く、AIなどを用いても正しい判定は原理的に不可能でしょう。いずれも、検査精度が十分ではないわけです。一方、マイクロ波は、ほぼ絶縁体である乳房をよく通り、深部に到達し、がんによく跳ね返ります。乳房正常組織は比誘電率が低く、乳がん組織は、細胞および血管に含まれる水分子のため比誘電率が高いからです。

散乱したマイクロ波から、前記の多重経路散乱場理論を用いて3次元構造を画像化すると、乳房内のがん組織だけをはっきり描出することができます。すなわち非常に高いコントラスト比の画像が得られるので、がんの見落としがなくなります。

— どのような仕組みで検査を？  
マイクロ波は、携帯電話やWiFi

で利用されている電磁波です。微弱なマイクロ波を出す発信器で、乳房の表面を軽くなぞるようにスキャンし、乳房表面の各点から内部に向かってマイクロ波を放射状に照射します。乳がん組織には正常な脂肪組織に比べてより多くの水分子が存在しているため、両組織の境目でマイクロ波が強く散乱します。あらゆる箇所から跳ね返った全データを計測し、それを用いて多重経路散乱場理論、数学的に3次元画像を生成し、リアルタイムで明瞭にがん組織を写し出します。高濃度乳房の原因物質は絶縁性であるため、高濃度乳房であってもそうでなくても明瞭に乳がんを捉えることができます。また、我々が開発したマイクロ波マンモグラフィ

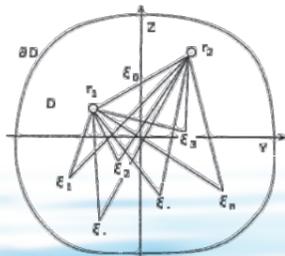
ファイは、画像計測にとって最も大切な、高い再現性があります。つまり、異なる時間に異なる観測者が測定したときにまったく同一の画像を出すことができます。残念ながら、従来の乳がん画像診断装置でこれが可能なものは存在しません。

## 世界で初めて「波動散乱の逆問題」を解決

— なぜこれまで、乳がん検査にマイクロ波は使われなかった？

マイクロ波を乳がん検査に使うためには、「波動散乱の逆問題」という応用数学史上の未解決問題を解く必要があ

木村教授が導き出した「多重経路散乱場理論」の基礎方程式



$$G(\mathbf{r}_1, \mathbf{r}_2, \omega) = \iiint_D \varphi(\mathbf{r}_1 \rightarrow \xi \rightarrow \mathbf{r}_2, \omega) d\xi$$

$$L\left(\frac{\partial}{\partial t}, \frac{\partial}{\partial \mathbf{r}_1}, \frac{\partial}{\partial \mathbf{r}_2}\right) \bar{G}(\mathbf{r}_1, \mathbf{r}_2, t) = 0$$

$\bar{G}(\mathbf{r}_1, \mathbf{r}_2, t)$ は $G(\mathbf{r}_1, \mathbf{r}_2, \omega)$ を $\omega$ に関してフーリエ変換した関数

$$\rho(\mathbf{r}) = \lim_{t \rightarrow 0} \left[ \text{Tr} \left[ \bar{G}(\mathbf{r}_1, \mathbf{r}_2, t) \right] \right] = \bar{G}(\mathbf{r}, \mathbf{r}, 0)$$

りました。これは、対象物にぶつかった散乱した波から、対象物の位置や大きさ、形を求める問題です。例えば、湖のどこかに塔が立っているけれど、濃霧で見えない場合に、湖岸のどこかで水面を揺らして湖全体に波を送ると、塔に到達した波はいろいろな方向に散乱します。そうして戻ってきた波を湖岸のあらゆる場所で計測し、それらのデータを解析することで、見えな

い塔の位置、大きさ、形状を理論的に決定する、これが「波動散乱の逆問題」です。私は20代の頃からこの問題に取り組み、10年がかりで解析的に解くことができました。

——先生が世界で初めて解かれた？

結果的にそうりましたが、意識していませんでした。この「多重経路散乱場理論」と、DCから20GHzの超広帯域の電磁波を発生させて観測する世界最高性能の信号発生技術、アンテナ技術の開発に成功し、2015年に日本医療研究開発機構(AMED)の事業に採択、マイクロ波マンモグラフィの原型機を開発、兵庫県立がんセンター、神鋼記念病院、神戸大学医学部附属病院、岡本クリニックなど複数の医療機関の協力を得て患者ら約400人に臨床研究を実施した結果、超高度で乳がん検出が可能であることが実証されました。

——普及への道筋は？

2020年度中に国内薬事承認を得るための治験に入ります。通常、国の認可を得るには数年かかりますが、2019年4月に厚生労働省の「先駆け審査指定制度」の対象品目に指定されたので、審査期間が大幅に短縮される見込みです。

2019年9月には、神戸大学発のスタートアップ企業株式会社 Integral Geometry Science (I-GS) においでし

現在、I-GS社の売上の柱になっているのは蓄電池内部の非破壊画像診断技術です。近年、スマートフォンなどに使用されているリチウムイオン電池の爆発事故が多発していますが、私たちはリチウムイオン電池内部の異常電流密度分布を検知する電流経路映像化装置を実用化し、スマートフォンや電気自動車の分野など、多くの企業にご採用いただいております。I-GS社は設立以来7年間、赤字を出したことがありません。

——次はマンモグラフィが売上の柱に？

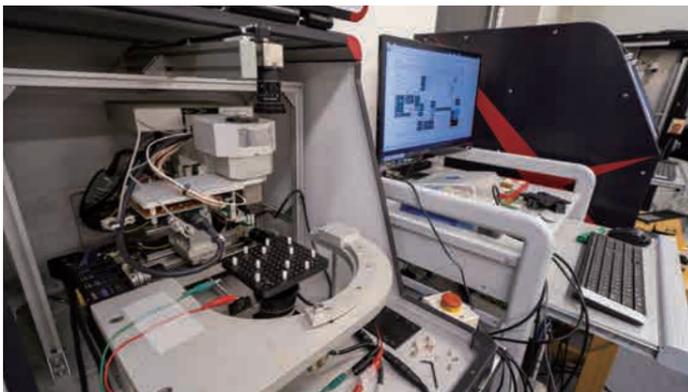
そうですね。2028年までに世界中に乳がん検診センターおよび機器販売サービス拠点を作ろうと思っているのです。その時点で年間売上目標を6300億円に設定し、うちマンモグラフィで3960億円を目標にしています。1年間で1億人を検査する計画です。この時にはI-GS社は兆円企業となっています。

——ほかに有望な応用分野は？

この新しい画像を作り出す数学は、波動の散乱の問題に普遍的に適用されるので、物体の存在を検出する、物体の内部を透視する、このキーワードすべてあてはまる計測に、革新がもたらされます。防犯、自動運転、資源探査、遺跡探査、工場生産物の異物探知など、あらゆる仕事の依頼が世界中から届いています。

防犯セキュリティから遺跡探査まで  
多重経路散乱場理論に基づく透視技術の可能性

マイクロ波マンモグラフィは  
Integral Geometry Science社を兆円企業にする

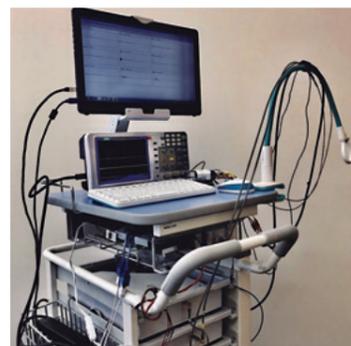


——今後、先生の研究が向かう方向は？  
化学反応の理論計算に興味があります。例えば、酸素と水を反応させれば水ができますが、そうした化学反応をコンピュータの中で完全に予測する数学ですね。いわば、あらゆる実験をコンピュータの中でできるようにするわけです。医薬品の合成においては「物質Aと物質Bを混ぜ反応させたらどうなるか」という研究を、狙いを定めながらも網羅的に行っています。こういった実験結果を理論的にかなり正

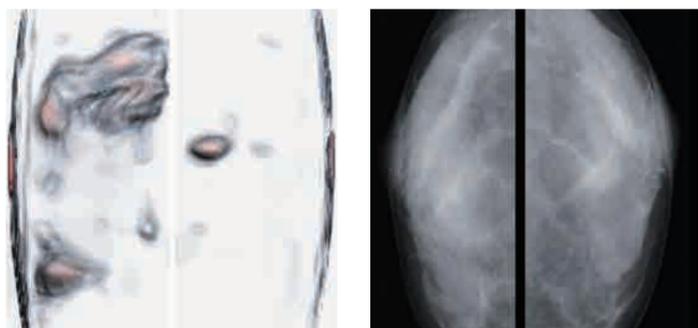
確に予測出来たら素晴らしいと思いませんか。  
——既に行われているAI(人工知能)による予測とは違う？  
遠くの箱にボールを投げていることができるロボットを作るときに、ニュートンの運動方程式をインプットしなくても、ボールを投げた結果の膨大なデータを学習させて、適切な初速度と角度をAIが決定する。私が興味があるのは、こういったことではなく、第一原理的というか、理論的に完

全に有限温度の問題を数物理学の方法により解析して、中間体、反応経路などを理論的に完全に決定する数学に興味があります。夢というところですが、もし、システムが完成したら、砂漠に工場を作りたいですね。世界中の研究者にソフトウェアを渡して、物質を選んでクリックすれば、自動的にコンピュータの中で化学反応が起こる、そして、実際にその工場を生産する、そんな事業をI-GS社で実現してみたいですね。

マイクロ波マンモグラフィの実用化と普及を進めるため、協力企業10社と資本提携(総額約20億円)を行いました。I-GS社は研究成果を世に問うために私が創業した会社で、「マイクロ波マンモグラフィ」関連特許を世界26か国で権利化しています。治験を経て、2021年には検査機器の販売を開始し、10年以内にマイクロ波マン



マイクロ波マンモグラフィによる検査は、アンテナで乳房をなでるだけで完了



右はX線マンモグラフィ、左はマイクロ波マンモグラフィによる検査画像。同じ患部を撮影したもので、検査精度の差は圧倒的。

モグラフィを使う乳がん検診センターを全世界に立ち上げ、年間1億人の乳がん検診を実施する計画です。  
——「多重経路散乱場理論」は他の分野にも応用できる？

そもそも、我々が導いた多重経路散乱場理論に基づく画像診断技術が最初に実用化されたのは、インフラ構造物の非接触検査の分野でした。コンクリート資材の劣化を検知する装置で、検査装置を搭載した機器を時速数十キロで走らせながら、リアルタイムで壁の中を立体的に画像化できる性能が高く評価されました。

歴史文化を継承し、過去と未来をつなぐために

# 市民とともに地域の歴史資料を保全



interviewee

大学院人文学研究科長  
文学部長 教授

## 奥村 弘

OKUMURA Hiroshi

1960年生まれ。神戸大学教授、大学院人文学研究科長、地域連携推進室副室長。専門は日本近代史、歴史資料学。主な研究領域は、幕末明治期の地域社会と地方自治形成過程。神戸市、姫路市等の多くの自治体の編纂、執筆に携わる。阪神・淡路大震災以来、歴史資料ネットワークの代表委員として、日本各地の大規模自然災害被災地で地域の歴史遺産保全活動を展開している。また内閣府「文化財保護と防災まちづくりに関する委員会委員」などに就任し、地域歴史遺産の保存活用について、広く社会に対して提言をなしている。

「人口の流動化と少子高齢化、さらには地震や豪雨災害の頻発によって、地域に保存されてきた歴史資料は消失の危機にある」。そう語る人文学研究科長・奥村弘教授は、自ら代表を務める「歴史資料ネットワーク」を通じて市民と専門家の協力体制を作り上げ、歴史資料の保全と活用に取り組んできた。その活動が評価され、文化遺産の継承に対する貢献を顕彰する「第13回読売あをによし賞」を受賞。さらに、この活動の総括を含む新たな研究が、2019年度科学研究費助成事業（特別推進研究）に採択され、「地域歴史資料学」のさらなる発展が期待されている。歴史資料を残していく活動の意義を、奥村教授に聞いた。

### 歴史資料保全活動から学問へ

—— 地域歴史資料学は、先生が拓かれた新しい学問分野？

大きく言えばそうかもしれません。「あをによし賞」受賞のきっかけは阪神・淡路大震災です。当時、さまざまな分野で、自らの専門分野の問題に取り組むだけでは災害対応も復興もできない事態に直面し、いろいろな人が自分の領域を越えて活動し始めました。歴史文化の領域でも同じことが起こり、新しい領域が生まれるきっかけになりました。

具体的に言うと、歴史資料の保有者と研究者の関係が問い直されたのです。通常、歴史研究者は、市民からさまざまな資料を提供していただいて、そこから歴史像を作り、論文などの形で発信します。しかし、阪神・淡路大震災のような事態になると、資料自体が失われてしまう。そんな事態に対して研究者は何をすべきかという課題が生まれました。そこから地域歴史資料学という学問が徐々にできあがってきたのです。当時は新たな学問分野を拓くことなど、全く考えていませんでした。とにかく歴史資料を守らなければならず、被災地での資料保全活動が先行し、後からその意味を考えることになったわけですね。



### —— 保全活動は順調に？

簡単ではありませんでした。もともと全ての研究者が市民の保有する資料に直接対応してきたわけではありませんが、市民の方でも何が歴史資料になるのかがわかりにくい。だから研究者から呼びかけても、「うちには国宝や重要文化財のような『ええもん』はない」と（笑）。でも、こっちは「ええもん」を探しているわけじゃない。地域の歴史や文化、さらにそこから日本全体の文化を考えていくような、最も基本的なものが歴史の資料になることをお伝えすることから始めました。古文書に限らず、日記、写真、古い本や道具など、全て貴重な歴史資料です。

—— どれほどの歴史資料が存在？

日本の地域社会は、自分たちの成り立ちに関係する重要なもの、歴史的な経験や文化を蓄積するようなものを残していく社会なのです。例えば、村の中心メンバーが資料に封印をしていて、それを解くには全員の賛同が必要、といったシステムを持っているところや、寺や神社にいろいろなものが残っています。私たちの概算では、少なくとも見積もっても、江戸時代の古文書だけで、日本全体で20億点はあります。これほど地域に歴史資料が残っている国は珍しく、日本の特色でもあります。

### 災害前の予防活動も重要

—— 被災資料の復元技術も研究？

燃えてしまった紙資料は難しくても、水に濡れたものや泥にまみれたものを残すことは技術的に可能です。資料の「救助」方法を、プロの救助と、第一次的な救助に分けて考え、地域歴史資料学においては第一次的な救助の方法を開発しています。それは、誰でも手元のものを使ってできる方法、例えば、濡れたものをキッチンペーパーで乾かすとか、布団袋の中に濡れた資料を入れて水を吸い出すといった方法で、プロの修復家に委ねる前段階の、被災現場での対処になります。被災した資料はどろどろになっていたり、臭かったりするので、もうだめだと思いがちですが、墨はほぼ変質せず、和紙の繊維も強いので、少し洗って乾燥させれば、その後もずっと残ります。

—— 歴史資料のデジタル化も有効？

デジタル化はむしろ、予防のためですね。東日本大震災の時、津波に吞まれてかなりの歴史資料が失われましたが、事前に写真に撮っておけば、現物はなくなっても記録は残ります。そうした予防的な悉皆調査（全数調査）をしていく作業も、まだ部分的ですが進めています。災害が起きてからでは、全部を救えるわけではないし、存在そのものが知ら



70<sup>th</sup>

### 人文学研究科の4つの柱 ～文学部70周年を迎えて～

神戸大学の文学部は1949年、文理学部として出発し、5年後に独立しました。以来、社会の中の文化的な水準、市民の共同性や文化を作っていく力を重視した人材育成を一貫して行ってきました。文化を次の世代に継承していくために、分野ごとの学術研究を通して文化を支える人材、しかも、専門家としての役割を果たせる人材の育成と、現代的かつ文化的な諸課題に共同して対応し、研究するためのシステムを持ち、実際に発信していくことを重視しています。

人文学研究科には、4つの柱があります。①歴史文化に関わる重要な役割を果たす「地域連携センター」、②神戸という場を通して国際的な諸関係を文化的に捉え直す「海港都市研究センター」、③工業や医療に関する倫理の問題を実践的に考える「倫理創成プロジェクト」、④国際交流を進め、積極的に日本学、日本文化の問題に対応する「日本文化社会インスティテュート」です。③では『石の綿—マンガで読むアスベスト問題』という漫画を、京都精華大学マンガ学部・研究科と一緒に制作し、出版しました。人文学の基礎的な分野から応用的な分野へと、専門を越えて展開する試みです。④ではオックスフォード大学で日本学を学ぶ学生を共同で教育するシステムが稼働しています。

2019年3月にはシンポジウム「MANGA」を開催。『石の綿』にご協力いただいた竹宮恵子さんをお迎えし、漫画という媒体を人文学の研究領域としてどう考えていくのかというテーマを取り上げました。また、10月から神戸新聞紙上で「21世紀の人文学—危機の時代を共に生きるために」というテーマの大型連載をスタートし、人文学の最先端の研究に対する社会的な理解を広げています。こうした形で文学部としての発信を強めつつ、70年の歩みを持つ意味を確認しながら、現代社会のより具体的な課題に対しても、人文学的発想で対応していきます。そのためにも、専門性を大事にしながら、社会に対応できる人材を育成する観点を保持していきたいと考えています。



年代までは人の生活環境に牛がいることは普通でしたが、今は牛なんてどこにもいない。また、薪でご飯を炊くこともなくなり、山と木、人の関係性は既に失われています。これらは暮らしの規範的なあり方という視点から見ると極めて大きく、深い変化です。そしてこの変化以前のことを知っている世代

は既に80歳を超えています。地域の歴史文化が消えてしまう危機に、少子高齢化が拍車をかけており、災害からの保全だけでなく、こうした観点からも歴史資料を残す重要性が高まっています。また、「生存の歴史学」という考え方があります。自然との関係の中で、日本人はどのように暮らしを伝えてきたのかという問題を、歴史学にきちんと組み込もうと。例えば、豪雨の際に、浸水しやすい地区と浸水しにくい地区がありますが、江戸時代以来の家は概ね浸水しにくい地区にあります。その場所に家を建て、集落を作ること自体が、人間が生きていくための知恵として伝えられてきている。そうした知恵を、歴史学は捉え切れたのかといえ、決

して十分ではない。そこをもう一度捉え直すためにも、社会の基盤に残っている歴史資料が不可欠なのです。——人々の暮らしに、歴史学が近づいていくイメージですね。そうですね。ただ、そのための方法論は難しく、個人研究では対応できません。実は、科学研究費助成事業（特別推進研究）に採択された研究課題（地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成）は、この発想のもとに始まったのです。10名以上の方々の共同研究で、全国の史料ネットで展開されてきた実践的研究を理論的に総括するとともに、「生存の歴史学」を研究する方法論も追究します。さらに言えば、世界各地の研

究者間での課題共有もターゲットです。文化が消えていくという事態は、規模や形は違っても、世界的に見られることが確認されています。先日、神戸大学のブリュッセルオフィス（ベルギー）で文化遺産に関するシンポジウムを開いた際、ヨーロッパでも、国宝や重要な文化遺産を、地域社会の存続や維持と関連づけて考えていく流れがあり、2018年のEU「欧州文化遺産年」の取り組みの中でも、問題提起がなされたことが報告されました。広く地域社会と関係させて文化遺産を考えることが、同時代的に起きている意味を問うことも、今回の特別推進研究のテーマのひとつです。

## 日本は千年単位の文化的変化の渦中にある

れていない資料には非常に対応しづらい。また、歴史資料の価値が社会的に共有されている場がなければ、保全の意義も共有されません。資料のありかを調査し、その意味を地域の方に伝えて、地域の中で残していく過程で災害にも対応していくことが重要であり、そのためには地域歴史資料学を学問として構築しなければなりません。

### 活動ネットワークが全国に拡大 ——活動が全国に広がっていますね。

阪神・淡路大震災以降、概ね2年に一度のペースで直下型地震が起きています。それらの被災地で私たちの経験を伝える作業を繰り返す過程で、現地ネットワーク（史料ネット）が生まれました。東日本大震災の時には、東北大学を中心とする「宮城歴史資料保全ネットワーク」が中核になりましたが、これは東日本大震災に先立つ宮城県北部地震のときに、私たちとともに活動を始めた人々のグループです。こうした組織が現在、25〜26都府県で活動しており、さらにネットワークを広げていくための基礎的な支援活動も進めています。

### ——若い方の参加も多い？

多いですね。神戸大学では大学院の学生が中心で、愛媛、島根、茨城のネットワークには特に学生の参加が多い。彼らは、地域を再発見する

こと、地域社会を理解することに興味を持っています。文学部で古文書を研究している学生にとって、歴史資料の所蔵者と直接話すことは、自分の研究の社会的な意味を再確認する機会になります。彼らが教員や学芸員になれば、地域の文化を問い直し、継承していく人材となるでしょう。——一般市民の参加も？

歴史資料ネットワークの会員数は約300人で、その半分が市民です。会員は会の運営全般に関与し、被災資料のクリーニングなどに、ボランティアとして従事してくれまます。年齢は高校生から80歳の高齢者までさまざま。学生時代に歴史に関わっていた方や、ボランティアがしたい方などいろいろです。同様の活動を各地の史料ネットでも進めているので、私たちの活動に対する認知が少しずつ広がっており、10月の東日本の水害の際には「歴史資料を捨てないで」という呼びかけが、一般のマスコミや各種の広報に載るようになりました。また、資料をお持ちの人からのSOSが各地の史料ネットに入ってくるようになっていきます。

### 歴史学の新たな視点と世界展望

——地域歴史資料学の現在の課題は？  
我々歴史研究者は、日本は千年単位の生活文化が消えていく時代に突入したと考えています。例えば、1960





# 神大生による神大生のための「学生サポート」

神戸大学には、学生が安心してキャンパスライフを送れるよう、様々なサポートを行っている団体があります。今回は、学生自身がサポーターとなり、同じ学生への支援を行っている2つの団体のメンバーを取材しました。

## Students' Support 02

### ピアサポーター

問合せ先：学生支援課 TEL：078-803-5429

開催日など  
詳細はこちら！



経営学部経営学科 4年 — 三島 春香

MISHIMA Haruka



— どのような活動を？ —  
ピアは「仲間」という意味なのですが、学生がサポーターとして、同じ学生との相談に乗るという活動を行っています。まだ立ち上げたばかりで、2019年の10月から本格的に稼働しました。今のところ、週に1回、お昼休みに鶴甲第1キャンパスのラーニングコモンズにブースを構えて、誰でも自由に立ち寄ってもらえるようにしています。  
相談の内容は、どんな小さなことでも構いません。例えば、大学の中でなかなか面白い活動がないかといった話を聞いて、私が知っている有志のプロジェクトを紹介したこともありました。また、本格稼働前に、新入生に向けて相談ブースを設けたことがあり、その時は履修に関

する相談などもあったそうです。  
— 心がけていることは？ —  
相談に来てくれる学生が何を求めているのかを、きちんと汲み取るように心がけています。アドバイスを欲しいのか、ちょっと背中を押してほしいのか、ピアサポーターという名前ですが、助けるというよりも伴走者として対等な関係で一緒に考えていくというスタンスなので、おせっかいにはならないようにしようと思っています。  
— 利用者の学生に知ってほしいことは？ —  
本当にどんな相談でもいいので、気軽に来てほしいなと思っています。私は、自分自身が学生生活で悩んでいた時があったのですが、大学の職員の人に相談するのはちょっとハードルが高いなと思ったことがあって、何か困ったときはもちろんですが、ちょっと話を聞いてほしいけど話せる相手がない…みたいなことでも大丈夫です。雑談のような内容でもいいし、深刻な悩みだったら、適切な相談先に繋げることができます。小さなことでも頼れる場所ができたので、ぜひピアサポーターへ話しに来てください。  
— ピアサポーターに興味のある学生に知ってほしいことは？ —  
何か勉強以外に新しい活動がしたい



な、という軽い気持ちで初めは来てもらって構いません。ピアサポーターとして活動するための事前研修も丁寧に行っていますので、興味があったら気負わず気軽に参加してください。今はまだ始まったばかりで手探りの部分もありますが、この活動がこれからも続いていくよう、たくさんのサポーターに参加してほしいと思っています。

## Students' Support 01

### キャンパスライフ支援センター 学生サポーター

問合せ先：TEL：078-803-5258

詳細は  
こちら！



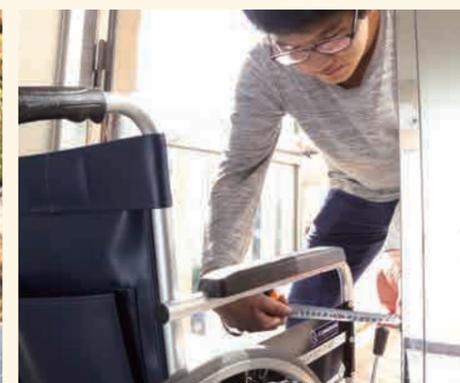
理学部化学科 4年 — 山添 智暉

YAMAZOE Tomoaki



— どのような活動を？ —  
障害があるなどの理由で、大学での勉強や生活に対してサポートを必要としている学生に向けて、支援活動を行っています。  
例えば、僕が今年参加した活動では、車いすでのキャンパス内調査を行いました。神戸大学の六甲台キャンパスは山の上にあるため、坂や階段がとても多く、車いすの方が移動するのがかなり大変な場所もあります。大学で作っている「バリアフリーマップ」を見ながら、実際に僕たちが車いすで移動してみ、問題のある個所や、より楽に移動できるルートを報告しました。  
また、聴覚障害を持つている方に向けて、PCテイクの支援活動も行っ

ています。授業の内容をリアルタイムで要約してPCに書き込み、学修のサポートを行う活動です。こちらは、現在は神戸大学には支援を必要としている学生がいけないので、NPOを通じてネットで映像・音声を送ってもらって、他大学の学生のサポートをしているメンバーもいます。  
— 活動を通して気づいたことは？ —  
車いすでの調査をやってみて印象的だったのは、坂が多いのもそうなのですが、道が狭いところが多いということです。歩道があっても、車いすで通るには幅がギリギリだったり、狭くて乗降が難しいバス停があったり。あと、普段歩いている時には気にならないような段差が、車いすの移動の妨げになることにも気づきました。  
構造上どうしようもない部分もあるのですが、この調査の報告書をもとに、改善できるところは直していったらいいと思います。  
— サポーターに興味のある学生に知ってほしいことは？ —  
留学に行つて違う世界を見るのもいいのですが、自分の身の回りにある知らない世界を知ることができて、なおかつ誰かの役に立つことができるというのが、サポーターの活動の魅力です。



車いすでの生活や、耳の聞こえない方を必要とする方が目の前に現れた時に、何ができるか考えられるようになります。少しでも興味があれば、ぜひこの活動を通して、今と違う世界を体験してみたいです。

## 「協働型グローバル人材」として、 国の枠を超えた課題に取り組む 国際人間科学部 グローバル・スタディーズ・プログラム「GSP」



GSPコーディネーター  
国際人間科学部 講師 正楽 藍  
SHORAKU Ai

グローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)は、地球規模での協働が必要な「グローバルイシュー」について探究することを目的とし、国際人間科学部の学生全員が海外研修とフィールド学習に参加する教育プログラムです。プログラムの狙いや特色について、GSPコーディネーターの正楽藍講師にお聞きします。

### — GSPの狙いは？

「協働型グローバル人材」を育成するというのが、このプログラムの狙いです。私たちの身の回りには、様々な課題・イシューがあります。4年間の学習のどこに、また、どのようにGSPを位置づけるかを、学生一人ひとりが決めるところに特徴があります。GSPには、実践型・研修型・留学型の3つの「GSPコース」があり、合計100を超えるプログラムが用意されています。大学側から一律に与えられるのではなく、

が、どんな課題に取り組む場合でも、「グローバル」な視点は欠かせません。環境問題や難民問題などはもちろんですが、日本のローカルな問題に見えるものでも、根っここのところでは他の国の問題と繋がっていたり、共通の課題を持つていたりすることがほとんどです。

また、それらの問題は、一つの専門性だけで対応できるものではありません。「文系だから理系の人と話ができない」ではなく、専門性の異なる様々な人と「協働」できる人になってほしい。そのために、自分が興味を持っている問題をきっかけに、それに関連する自分の専門以外の分野についても目を向けられるようになってほしいと思っています。

### — プログラムの特色を教えてください。

まず「実践型GSPコース」では、海外でのスタディーツアーや、インターシップに参加します。ツアーは教員が引率し、設定したテーマに詳しい方に会って話を聞いたり、関連する施設を訪問したり、現地の学生と交流したりします。教室でただ授業を受けるのではなく、海外での「実践」に重きを置いたコースです。

次に「研修型GSPコース」では、フィールド学習を国内で行うことに加えて、海外の語学研修やサマースクールに参加します。例えば日本の高齢化問題など、ローカルな課題に関心がある場合、このコースを選ぶこともよいと思

### — 3つのコースの違いは？

私が担当している「研修型GSPコース」の例ですが、まず1年生の内に海外研修で語学力を高めて、2・3年生になってから交換留学を目指すという、海外への志向が高いグループがいます。彼らは語学研修にかなり積極的

自分の意思で、ここに行きたい、これがしたいというものを選ぶのがポイントです。また、プログラムに参加する時期も、自分で決めることができます。必要だと思う知識をつけて、3年生になってから行ってもいいし、1年生の間にとにかく行ってみるのも構いません。「全員留学」を掲げる大学・学部は最近増えてきていますが、この自由度の高さが、他の大学にはあまり見られない特色だと思います。

### — プログラムに参加した学生の様子は？

「実践型GSPコース」では、海外でのスタディーツアーや、インターシップに参加します。ツアーは教員が引率し、設定したテーマに詳しい方に会って話を聞いたり、関連する施設を訪問したり、現地の学生と交流したりします。教室でただ授業を受けるのではなく、海外での「実践」に重きを置いたコースです。

参加して、TOEFLやIELTSなどのテストも受けてと、とても意欲的です。

一方で、実は指導していて面白いのは、海外にそれほど強い関心がなく、国内でフィールド学習ができるから「研修型GSPコース」を選んだという学生です。そういう学生は、語学研修から帰ってきた時に話を聞くと、目の色が変わっていることがあるんですね。現地で会った海外の学生と、自分の興味のあるテーマについて話すことができたとか、ホームステイ先の人が、自分の話にすごく興味をもってくれたとか。そのような経験を通し、国内のことばかり関心があった学生が、その課題は日本だけの話ではないんだというところに、自分で気づいてくれたんだなど感じます。

— **どんな学生に来てほしいですか。**

「留学に興味はあるけど、海外で何を学びたいのかはまだ分からない」という方は、多いのではないのでしょうか。そういう人にこそ、このGSPに触れてもらって、本当にやりたいと思うことを見つけてほしいです。誰も答えを教えてくれない、自分で見つけなければならぬというのは、苦しいことでもあると思いますが、GSPオファイスの教員が指導していきますし、周りの学生も同じように頑張っている環境であれば、きっと何かを見つけていけることができると思います。

### Voice



国際人間科学部 環境共生学科 3年  
生水口 翼 SHOUZUGUCHI Tsubasa



国際人間科学部 グローバル文化学科 3年  
三好 佑奈 MIYOSHI Yuna

私は「**留学型GSPコース**」で、オーストラリアのクイーンズランド大学へ半年間の交換留学に行きました。その前段階として、「**研修型GSPコース**」のプログラムで、ニュージーランドでの1か月の語学研修にも参加しています。

オーストラリアは観光大国として有名ですが、中でもクイーンズランド大学は、オーストラリアで唯一、国連世界観光機関の観光教育認証を取得している大学です。世界トップレベルの観光学を学ぶことに魅力を感じ、この大学への留学を決めました。ディスカッションやプレゼンテーションなど、自分から発信しなければならない機会が多く、大変でしたがとても勉強になりました。

GSPでは、交換留学であっても、留学先でフィールドワークをする必要があります。私は、ブリスベンで開催されたアジアと太平洋の140都市が参加するサミットのボランティアに参加し、フィールドワークを行いました。ブリスベンと神戸市が姉妹都市になっていることもあり、サミットには神戸市の副市長が参加されていて、そのサポートのようなことも少しさせていただきました。

留学を通して、価値観の変化もありましたし、成長できたと思います。帰国後も現地でもできた交遊関係は続くので楽しいですし、これからの勉強や就職活動へのモチベーションを高めることもでき、とても実のある経験になったと思います。



国際人間科学部 環境共生学科 3年  
生水口 翼 SHOUZUGUCHI Tsubasa

僕は「**実践型GSPコース**」で、ウガンダとインドネシアへ行きました。どちらも約2週間のプログラムでした。

ウガンダの方は、ポストコロニアル(植民地主義以降)のアフリカの国の暮らしを学ぶというような内容で、現地の大学生とディスカッションをしたり、呪術師の方やNGOを訪問したりしました。アフリカは自分1人ではなかなか行きづらいので、先生が引率してくれるスタディーツアーなら安心ですし、深い体験ができそうだと考えて選びました。

また、インドネシアの方は、マングローブの植林が主なテーマだったのですが、それ以外にも自分で自由にフィールドワークができ、現地の学生とほぼ毎日接することができたのが良い経験になりました。「教育」をフィールドワークのテーマにしていたので、現地の小・中学校や高校を訪問し、日本を紹介する授業を行ったりもしました。

今は「GSP演習(リフレクション)」という授業で、現地での体験を他の学生と共有したり、グローバルイシューについて考えたりしています。プログラムに参加するだけではなく、そこでの体験を、これからの学びや将来にどう繋げていくかが大事だと思います。僕は今、それを模索しているところです。今度は1年間の交換留学でオーストリアに行くことにしているので、その間に何か見つけたいと思っています。

### ■ グローバル・スタディーズ・プログラムの流れ

**事前学修**

- **グローバルイシュー概論**  
代表的事例の現状と解決策を専門的見地から学修
- **グローバルイシュー演習**  
アクティブ・ラーニングを通じて具体的な事例を学修
- **オリエンテーション**  
自らが取り組むグローバルイシューに関する具体的な課題を設定

**コース選択**

- **実践型GSPコース**  
海外スタディーツアーまたはインターンシップ
- **研修型GSPコース**  
海外語学研修またはサマースクールと、国内フィールド学修
- **留学型GSPコース**  
交換留学または中期留学

**事後学修**

- **リフレクション**  
「GSPコース」での体験の共有
- **グローバルな課題に対する自己の実践の意義づけ**
- **フィールド学修についての成果発表とレポート作成**





# マンガやデザインを通し、面白さと魅力を分かりやすく伝える

誌面に登場している個性的なキャラクター **コベピポ**  
 神戸在住の方は、きっとどこかで見たことがあるのではないのでしょうか。  
 このキャラクターの生みの親は、エッセイ漫画家・イラストレーターの都あきこさん。  
 神戸大学理学部での体験をもとに、コミックエッセイ『今日から「菌トレ！」』や『花の!?オカン女子大生』の執筆もされた都さんに、お話を伺いました。



**都 あきこ** <http://www.facebook.com/Miyako.Akiko.OP>  
 神戸市在住のイラストレーター、エッセイ漫画家。生活や健康術、サイエンスからビジネスまで幅広いジャンルのテーマを執筆し、「楽しくわかりやすく」をモットーにコミック表現の可能性を常に模索している。神戸で当地キャラクター「コベピポ」も展開中。ヨガをきっかけに東洋医学、さらに生命科学にも興味をもち、40歳で神戸大学理学部生物学科へ編入学。ヨガの講師としても活動している。

「黒潮漫画大賞」への入選を機に独立された  
 と伺いました。それまではどのようなことを？

もともと漫画家志望だったわけではなく、大学卒業後は広告代理店で働いていました。入社後すぐに一から企画を任せられ、忙しくて寝る暇もないような環境で。あるとき、ひとコマのイラストと2、3行の文章で、自分の思いのたけを綴るようなマンガを描きはじめたんですね。それを、たまたま見つけた黒潮漫画大賞へ応募したところ、当時はエッセイマンガというものがなく、面白いジャンルだということが入賞して。それで気をよくして、独立して自分でやっていくこうと会社を辞め、しばらく海外をバックパックで旅した

後、東京へ行きました。  
 『著書の『パパ抜き子連れ旅』が印象的でした。』

東京に行った後、すぐに結婚することになりました。『パパ抜き子連れ旅』にも描いたのですが、当時、夫の転勤で知り合いのいない雪国で子育てをすることになり、鬱っぽくなってしまったんです。母親が感じる社会から見放されたような孤独感に襲われ、ストレスで10円ハゲもできてしまいました(笑)。子どもは可愛いんだけど、でも自分のやりたいことだっただけで大切にしたい！と思い、もう一度大好きだった海外へ行こうと、2歳の息子を連れ



て2か月間の旅に出ました。不安もあったのですが、実際に行ってみると、子どもを連れてくるからこそ味わえる楽しみがあることが分かってきました。何かを理由に「できない」と思い込んでしまうことってよくあると思うのですが、見方を変えれば「できる」に変わるし、思いがけない発見に繋がることもあるんだと実感しました。  
**— どのようなきっかけで神戸大学へ？**  
 私、実はヨガの講師もやっています。20代でぎっくり腰になって、薬にもする思いで色々試してヨガにたどり着いたんですけど、ヨガと関連する東洋医学のいろんな流派を学んで、面白いなと思っていました。それで、十数年前に統合医療が叫ばれ始めたときに、西洋医学や体のことについても、もっとアカデミックに学びたいと思うようになりました。それと、そのころ

母ががんを患ったこともあり、がんの発生のメカニズムについても知りたくて。たまたま、同年代で大学の医学部に編入した友人がいて、毎週末、勉強会を開いてもらうようになりました。そうしている内に、自分も大学に入り直して学ぶ道があるのではと思うようになったんです。お医者さんになりたいわけではないので、医学部はハードルが高いなと思ったのですが、神戸大学の理学部で生命科学について学べるということが分かり、当時は神戸にUターンしていたので、思い切って受験することにしました。

子育てをしながらの受験勉強やキャンパスライフはかなり大変だったのでは？

ええ、もうめちゃくちゃ大変でした(笑)。その時自分は40歳で、子どもは小学生と中学生。仕事もヨガの講師も辞めなかつたので、本当にハードな生活をしていました。でも、生物学や生命科学は自分の身体に関わることなので、勉強も苦にはならなくて、その神秘や奥深さにどんどん引き込まれましたね。

大学に入ってから、もともと文系なので全てが暗号のように見えましたし、数学関係も苦手で、同級生にランチをおごって教えてもらったりと、必死でした。でも、ラボの教授がとても理解のある方で、「あなたの良さを活かしてほしい」と、実験マニュアルのイラストや図を描かせてもらえたりもしました。

大学での経験はお仕事にどのような影響を？

大学に入り直して良かったのは、理学部での経験を通して「仮説を立てて証拠や根拠を得る」というやり方を身につけたこと

拠を得る」というやり方を学べて、ものの見方が全く変わったことです。それまではエッセイマンガで「自分がどう思ったか」という主観を描いてきたんですけど、客観的な事実をどう分かりやすく伝えるかを考えるようになりました。著書の『今日から「菌トレ！」』も、授業で習った微生物学が、家や生活に直結しているすごく面白くて、その面白さを伝えたいと思い、たくさん文献や論文を調べてマンガにしました。

また、イラストレーションの分野では、メトロこうべの地下通路に全長45mと60mの壁画を描かせていただいたのですが、その片方「昔なつかしくわくわくさんぽ道」は神戸の歴史をテーマにしています。そのため資料をかなり詳細に調べる必要があり、ここでも理学部で培った手法を活かすことができました。

私は研究者には不向きでしたが、これらのような、専門的なことを分かりやすく伝える「サイエンスコミュニケーション」の分野に、今後も取り組んでいきたいと思っています。  
**— 「コベピポ」が生まれたきっかけは何だったのでしょうか。**

これは実は、ある企業の企画でプレゼンしたんですけど、落ちてしまって、10年くらい眠っていたんです。でも、駅を舞台に描いた大好きなキャラクターたちで、何かに使えないかなとは思っていました。そしたらあるとき、個展を開かないかと誘われて。エッセイマンガ家なので、個展をするという発想がなくて断っていたんですけど、「あの企画があるやん！」と思い出し、「コベピポ」と名付

て発表しました。そしたら、見てくれた人たちが、「いいやん！ご当地やん！」って言うってくれたんです。そこから2年の間に、神戸市に取り上げてもらうたり、神戸まつりや北野の異人館、神戸阪急などでも使ってもらいました。それぞれのキャラクターが個性的なプロフィールを持っているので、それを通して、神戸のさまざまな文化や魅力を伝えていきたいです。  
**— 最後に、神大生や高校生へ向けてメッセージをお願いします。**  
 私は絵を習ったこともなくて、ただ好きでらくがきをずっと書いていたんです。自分がご機嫌でやってたことが、気が付いたら仕事になっていったというか。皆さんも、自分がご機嫌でできることは何かという視点で将来のことを考えたら、無理なく進めるんじゃないかと思っています。  
 一方で、「自分らしさを知りたければ、自分らしくないことをしよう」という言葉を聞いて、大切なことに気づかされた経験もあります。自分に欠けているものが何か具体的に分かり、逆に自分が何を持っているのかも見えてくることがありますので、「らしくない」ことをあえてやってみるのもいいのではないのでしょうか。  
 とはいえ、人生は長いですから！今選んだことが全てではないです。私みたいに40歳から大学に入り直して新しいことをやっている人間もいるので、あまり細かいことを考えずに、好奇心に任せているんなことに挑戦してみてほしいなと思います。

●今日から「菌トレ！」都あきこ【著】/佐伯圭一【監修】小学館 ●ファンも知らない!?タカラジェンヌのすべて 都あきこ【著】三栄 ●未来の健康防衛隊 都あきこ【イラスト】/吉澤 穂治【監修】保育社



「六甲マルシェ」では、会場のデザインや装飾も学生たちが手掛けた

Nadaku

# 「建築学生」が地域をつなぐ

神戸大学が本部を置く灘区で「まちづくり活動」を展開している「まちプロジェクト」は、工学部建築学科の学生を中心とするグループだ。2007年に活動を開始し、以来13年間、灘区という「地域」に溶け込んで、学生ならではの発想で地域活性化に取り組んでいる。第13代 代表の檜垣裕一さんに、最近の取り組みを聞いた。

## 「まちプロジェクト」とは？

建築学科の研究室のプロジェクトです。建築や都市計画について勉強している学生だからこそできるまちづくりってあるんじゃないか、という発想から始まりました。活動には①地域の活動に参加する、②地域にイベントを作る、という2つの軸があります。①については、地域のイベントや祭りに参加しており、②については、毎年8月末に自分たちの主催イベントを開催しています。メンバーは約20人です。

## 「地域のイベント」で皆さんは何を？

いろいろなパターンがあります。例えば、地域の祭りに毎年参加して神輿をかついだり。地元の方は「若い人が少なくなくなって神輿をかつぐ祭りが難しくなった」と仰るので、僕たちが参加することで祭りの継承をお手伝いできるんです。そこからコミュニティが活性化されて、僕たちの主催イベントにも参加してもらえたりと、相互の交流が生まれてきます。

まちづくりには、建物や都市のデザインだけじゃなく、人間のネットワークやコミュニティの維持・形成といった面も含まれます。どちらも大学の授業で学ぶことですが、勉強だけで終わらせず、実践できる場になっていることが、まちプロジェクトの活動の良いところだと思っています。

## 10月には「六甲マルシェ」というイベントに参加されましたね？

灘区の住宅建設会社が開いているイベントで、同社の大きな駐車場を会場にして、じみとなり、ボックスを見ると「今年もTシャツ回収の月になったか」と(笑)。

## どのように再利用を？

例えば、角材や園芸用の支柱などを組んで高さ3メートル弱のオブジェを作り、会場の六甲道南公園に設置します。そして、フェス当日、子供たちに不要Tシャツに絵を描いてもらって、それをオブジェのフレームに帆を張るようにどんどん飾っていきます(写真参照)。骨組みだけだったオブジェが色とりどりの布で埋められていくと、子供たちは大喜び、親御さんも子供が絵を描いたTシャツの前で写真を撮って楽しんでくれます。今年は初めて、夜間のイルミネーションにもトライしました。ほかにも、輪投げ、縄跳び、ミサンガ作りなどのアトラクションも好評でした。ミサンガや縄跳びの縄なども全てTシャツで作るんです。

## 運営費はどう賄っている？

灘区から助成金を得ているのと、自分たちが地域のお店に協賛をお願いしています。

## 「まちづくりポスター」という活動も始めていますね？

JR六甲道駅前にある「ウェルブ六甲道1番街」の事業者の会の皆さんと、以前からイベントを共同開催したり、クリスマスイルミネーションを手掛けたりしてつながりがあります。その商業施設を盛り上げるために、ちよっと面白いポスターを作ってみよう。各テナントに合わせて企画し、自分たちで写真も撮って、デザインを



「まちTフェス」より。子供たちが絵を描いたTシャツがオブジェを彩る



まちプロジェクト実行委員会 代表  
檜垣 裕一 HIGAKI Yuichi  
工学研究科建築学専攻 1年

地域のお店に出演してもらい、そこに地域住民の皆さんをお迎えして楽しんでいただくイベントです。会場にはお総菜や黒毛和牛のローストビーフ、ワイン、カレー、野菜、パンなどの店が並んで、想像以上に大盛況でした。

もともと企業側に、大学生と一緒にマルシェを開きたいという意向があり、8月半ばに紹介を受けました。僕たちはイベントの企画段階から関わらせていただき、9月以降、企業の企画会議に出席して、マルシェの内容や進行について打合せを重ねました。僕たちからはワークショップの開催など、いろいろな提案をさせていただきました。最終的には、建築学科の強みを生かして会場のデザインも担当させてもらいました。全12案のデザインを考え、企画会議に諮り、練り上げていきました。自分たちの考えたものが形になるのは嬉しかったですね。マルシェの当日、僕たちが子供たち向

## 制作し、商業施設内に掲示しています。

## 「顔の広いグループ」ですね。

灘区で10年以上活動していることで、地域とのつながりはかなり広がっています。いろんな人を知っていますよ(笑)。

## 今後の活動については？

今回の六甲マルシェのように、自分たち

けに行ったミサンガ作りのワークショップも好評でした。地元の企業と大学生が共同で地域の人々のためにイベントを開催して親交を図る、まさに「まちプロジェクト」の名にぴったりの活動になりました。

## 「主催イベント「まちTフェス」とは？

僕たちの活動コンセプトのひとつに、まちで不要になったものをリユースすることでものづくりをし、まちを彩る、という考えがあります。「まちTフェス」は、地域の人々から不要になったTシャツを集め、それらを装飾などに使って、見慣れた場所にいつもと違う風景を作り出すイベントです。まちプロジェクトの顔となるイベントにしようとスタートし、今年で13回目を数えました。

不要なTシャツを回収する上で、地域のお店や小学校などに回収ボックスを置かせていただいています。毎年同じ時期にお願いますので、地域の人々にもすっきりおな

の企画したものを形にできる機会を増やしていきたい。そのためには、地元の企業を含め、地域とのつながりを大切にしていきたいと思います。僕たちが関わることで、地域の人々が楽しんでいる姿を見ると、やりがいを感じます。これからも地域の活動の継続に貢献していきたいと思っています。

ブリュッセルオフィス Kobe University Brussels European Centre

神戸大学は、本学のパートナーであるブリュッセル自由大学(蘭語系)内に、神戸大学ブリュッセルオフィスを設置しています。国際機関の本部が多く置かれ、ヨーロッパの首都機能を果たしているベルギー・ブリュッセルで、欧州の諸大学や研究機関との学術・研究交流の促進、留学生・研究者ネットワークの構築など、国際連携拠点として、様々な活動を行っています。



神戸大学ブリュッセルオフィス  
第10回 シンポジウムを  
開催しました

10月22日にベルギー・ブリュッセルにて国際シンポジウムを開催しました。第10回を記念した今回のシンポジウムは、1. 日EU間EPA・SPA、2. 食品科学、3. 歴史文化財の3つをテーマとして取り上げ、約140名にも及ぶ日本・EUの政府関係者、研究者、学生、ビジネスパーソンなどの参加者は、熱心に発表に聞き入りました。その後の質疑応答では、活発な議論が繰り広げられるとともに、今後の協力について協議が行われました。

神戸大学は、2010年にブリュッセルオフィスを開設して以来、日欧間の学術交流を活発化させるべく、



欧州での活動を強化してきました。ブリュッセルオフィスシンポジウムはその取り組みの一環として例年開催してきたもので、最新の研究成果を共有するのみならず、政府関係者や研究者の間での情報交換やネットワーキングの場としても機能してきました。

ブリュッセルオフィスが中心となって行ってきたシンポジウムを含む一連の活動によって、多数の研究者の交流が深まり研究成果が生まれるとともに、これまでに140校を超える欧州の有力な大学と学術交流協定を締結しており、研究者や学生が活発な学術交流を行っています。このような成果が評価され、ブリュッセルオフィスは令和元年度学長表彰を受賞し、第10回を記念する今回のシンポジウムに花を添えました。

また、今年度からは本学の職員がブリュッセルに常駐することになりました。この職員の活躍により、本学と欧州の大学・研究機関との双方向の交流がさらに拡大することが期待されます。



ドゥオーモ(ミラノ大聖堂)にて

自分のアイデンティティについてより考えるようになりました。半年間のミラノ生活は私の人生においてかけがえないものです。

交換留学に挑戦し外の世界を見たことで、日本について、また自分のアイデンティティについてより考えるようになりました。半年間のミラノ生活は私の人生においてかけがえないものです。

日本の外の世界を見てみたいと思ひ、大学入学前から交換留学に挑戦しようと考えていました。交換留学では神戸大学にない科目も履修できます。行き先をイタリア、特にミラノのボッコリーニ大学に決めた理由は、移民と人権について学びたかったからです。地中海に面するイタリアは移民・亡命者がEU圏内に入る最初の国です。また、イタリア含めEUは世界最高峰の人権保護制度を誇ります。法制度や社会倫理は各国の地理・文化的背景も反映しているため、クラスで一人のアジア人だった私は理解に苦しむ事も多々ありましたが、教授やクラスメイトが親切に教えてくれました。



お友達との食事会(右)

留学だより

ミラノ「ボッコリーニ大学」に交換留学  
法学部法律学科4年 中島紗良  
NAKAJIMA Sara

勉強、サークル、アルバイト  
夢に向かって様々な経験を

Q 神戸大学に来る前はどんなことを？

高校を卒業してから、日本語学校に2年ほど通って勉強をしていました。料理人になりたいという気持ちもあって、専門学校に行くか留学するかで迷ったのですが、国費留学生として留学するのであれば、両親の負担も少ないので、その方がいいなと思って。関西の雰囲気が好きで、日本語学校の先生に勧められて神戸大学に来ることにしました。

Q どのようなキャンパスライフを過ごしていますか？

経営学部で、企業の戦略やマネジメントなどについて学んでいます。先生も分かりやすく教えてくれますし、分からないところは同じ学部の友達に教えてくれたりして、とても助かっています。また、「ぺんぺん草」という手話のサークルに入っていて、鉄板焼き屋さんでアルバイトもしています。

Q サークル活動とアルバイトもされているんですね！

もともと手話に興味があって、大学に入った時に何か新しいことを始めようと思って、「ぺんぺん草」に入りました。実は、サークルに入る前は手話は世界共通だと思っていたのですが、国によって全く違うと知って驚きました(笑)。マレーシアの手話も機会があれば勉強したいです。とても仲の良いアットホームな雰囲気ので、集まって手話で会話したり、学童保育所で手話講座をしたりと、楽しく活動しています。

アルバイトも、単にお金を稼ぐだけではなく、日本ならではのお客さんへのサービスや、目上の人への接し方など、たくさんのお客さんのことを学んでいます。日本の敬語の使い方はとても難しいですが、お店で実践できて、こういう風にすればいいんだと覚えることができました。

Q 今後の目標を教えてください。

将来は、企業でマネジメントに関わりたいです。せっかく日本語をたくさん学んだので、マレーシアと日本の橋渡しになるような仕事ができればいいなと思っています。

そして、もともとの夢だった料理人も、諦めるわけではなくて、最終的には自分のお店を持ちたいと思っています。それが叶えられるよう、これからいろんな経験を積んで、頑張りたいです。



手話の仲間達と



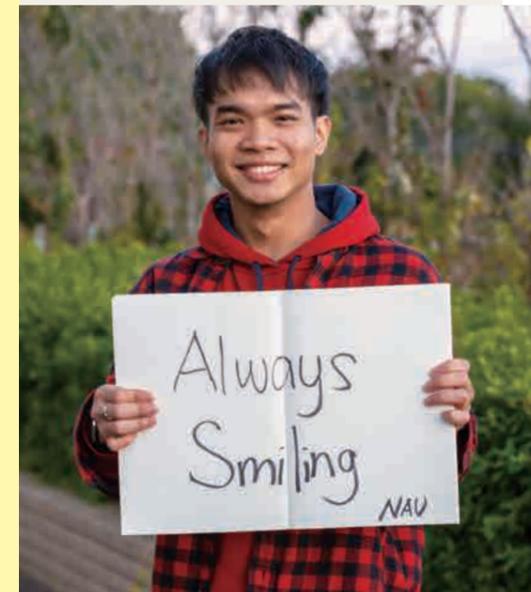
ぺんぺん草ステージ発表後の集合写真



ペトロナスツインタワー

世界各国から来た約1400人の留学生が神戸大学で学んでいます。このコーナーでは、母国の文化や習慣などの話を交えながら、国境を越えて頑張っている留学生にスポットを当てます。

こんにちは！  
留学生です



ナウファル アフィック ビン ナサルディン  
NAUFAL AFIQ BIN NASARUDDIN

経営学部経営学科3年  
マレーシア出身。フルネームがとても長いので、日本では「ナウさん」と呼ばれている。現在は一人暮らしをしており、母のありがたみを改めて感じたとのこと。座右の銘は「Always Smiling」・いつも笑顔で。



マレーシア

東南アジアの中心に位置し、マレー半島とボルネオ島の一部から成り立つ立憲君主制国家。多民族国家で、人口は約3,200万人。首都クアラルンプールの「ペトロナスツインタワー」やモスクがとても有名。

# Mini News

## 神戸大学初の統合報告書を発行しました

10月、神戸大学として初めて「神戸大学統合報告書2019」を発行しました。大学案内でも事業報告でもない、「神戸から世界へ 過去から未来へ」をテーマに、神戸大学の「これから」をお伝えする内容となっています。

統合報告書は大学ホームページで公開し、WEBアンケートも行っております。是非ご一読いただき、ご意見をお聞かせください。



統合報告書はこちらから。

## 発行を記念して「シンダイシンポ 2019」を開催しました



関西学院大学商学部教授/学長補佐 阪 智香氏をお招きしました。ダイアログ(対話)では、「神戸大と創ろう 人・価値・未来」をテーマに、関連な議論がなされ、会場からも多くの質問がありました。

シンポジウム終盤では、公務の合間を縫って駆けつけていただいた久元 喜造 神戸市長からご挨拶をいただき、盛況のうちに幕を閉じました。



11月9日(土)、統合報告書の発行報告会として、六甲台第二キャンパスの六甲ホールにて「シンダイシンポ 2019」を開催し、200人近くの方に来場いただきました。

シンポジウムでは、神戸大学からは武田学長と若手事務職員が、それぞれ「神戸大学のビジョン発信」「神戸大の統合報告」と題した講演を行いました。また、ゲストには、オムロン株式会社執行役員副社長 宮永 裕氏(本学法学部卒業)、有限責任あずさ監査法人 統合報告CoEパートナー 大槻 櫻子氏(本学経済学部卒業)、

## 「神戸大学ビジョン発信プロジェクト」の取り組み

統合報告書の作成、シンポジウムの開催は「神戸大学ビジョン発信プロジェクト」が中心となり、活動を行いました。

「神戸大学ビジョン発信プロジェクト」は、神戸大学の戦略的情報発信、教職員の協働意識や求心力の向上などを目的としています。

プロジェクトのメンバーは部署を横断して自発的に集まった若手職員が中心となっており、教職協働でプロジェクトを進めています。



### 読者の皆様へアンケートのお願い

神戸大学広報誌『風』14号をお読みになったの感想をお聞かせください。今後の誌面作りの参考にさせていただきます。

- 1.どの記事に関心を持たれましたか 2.その記事についてどのような感想を持たれましたか 3.今後読みたい記事 4.その他何でもご感想を

アンケートの回答は神戸大学広報課のメールアドレスにお願いします。

ppr-kouhoushitsu@office.kobe-u.ac.jp

※ご職業、年齢を書き添えていただくと幸いです。

WEBフォームもありますので今すぐアクセス!



日々更新中!



公式 Twitter 「@KobeU\_PR」



公式 Facebook 「神戸大学\_Kobe University」



公式 YouTube 「神戸大学Kobe University」



公式 Instagram 「kobe\_university」

## 神戸大学基金だより

よろしく  
お願いします



2022年、神戸大学は前身である神戸高等商業学校の創立から120周年を迎えます。1949年、新制大学として再スタートしてからは、さまざまな学校を統合、また新学部を設置して現在にいたり、卒業生は約15万人を数えます。

多くの卒業生が、キャンパスライフの思い出として懐かしむのが、クラブや同好会などの課外活動です。現在、学内の公認団体は100あり、活動環境の維持・向上に部室棟の整備が欠かせませんが、学内の施設は老朽化が目立ち、残念ながら快適とはいえません。そこで、創立120周年を記念し、鶴甲第1キャンパスの部室棟を建て替える計画を立てています。

課外活動の支援は、大学運営の予算外の支出となり、神戸大学基金の重点サポート分野です。新しい「クラブハウス」の建設に向け、皆さまからのご寄附を何卒よろしくお願いたします。

※神戸大学基金へのご寄附は、確定申告を行っていただくと税制上の優遇措置を受けることができます。



※神戸大学基金については、ホームページもご参照ください。

神戸大学基金 検索



## 同窓会・校友会・育友会 アラムナイ

### ミャンマー神戸大学同窓会会長が語る、「ミャンマーと日本の教育交流」

～神戸大学工学振興会(KTC)の講演会より



ティン氏は、ヤンゴンで「ティンミャンマー・ランゲージセンター」を設立し、多くの日本語教材を開発・出版しています。技能実習生として訪日・滞日するミャンマー人が大幅に増え、日本語学習者の増加率が近年では前年比70%以上と、東南アジアでは群を抜いているとのこと。日本からの注目も高まり、神戸大学グローバルチャレンジプログラムをはじめ、さまざまな交流が広がっていることを紹介されました。

ティン氏の留学には元日本兵からの援助があり、ミャンマーと日本との架け橋になる、という「恩返し」の思いをお持ちです。日本大使館主催行事や国際奉仕活動のサポートをはじめ、日本人墓地の戦没者慰霊碑建立に尽力したり、ミャンマーを訪れた日本人学生に歴史的関係を説明するなど、語学教育のみならず民間交流の大きな役割を担っておられます。



1993年から文学部と文化科学研究科で比較言語学を学び、2005年にミャンマーに帰国したティンエイエイコ氏は、2011年にミャンマー神戸大学同窓会を発足し、インターンシップの受け入れや積極的な人材交流など、幅広く活躍しています。5月17日(金)、神戸大学工学振興会(KTC)総会の講演会で、ミャンマーにおける日本語教育やグローバル人材の育成など、具体的な活動をお話いただきました。

※詳しい講演内容は、KTCのWEBサイト (<http://www.ktc.or.jp/> 機関誌89号) をご覧ください。